

論 文

## 少・青年期の渋沢栄一と『論語』

左 曼 麗

上海立信會計金融學院日本語学部講師、広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Young Eiichi Shibusawa and *the Analects*

ZUO Manli

**Abstract:** Eiichi Shibusawa (1840-1931), a leading figure in the development of Japan's modern society, is often referred to as the "father of Japanese capitalism." He participated in the establishment of more than 500 enterprises and economic organizations. Nowadays, he is remembered mostly as an "ethical capitalist," or more specifically, a "Confucian capitalist." His famous work, *The Analects of Confucius and the Abacus*, is widely known in Japan, and other countries. With a view to establishing a connection between Eiichi Shibusawa and *The Analects*, this paper reconsiders Eiichi Shibusawa's experiences in his youth, and analyzes what he had learned and experienced, especially his encounter with *the Analects*. First, this paper investigates the social background of Eiichi Shibusawa's thought, and summarizes it in the following three points: 1) the situation of Sinology education in the late Edo period, 2) the characteristics of the rich peasant class in the late Edo period, and 3) the business ethics thought of Edo merchants. Second, this paper investigates the persons who had important impacts on the formation of Eiichi Shibusawa's thoughts, such as his father Uemon Ichiro, his cousin Atutada Odaka, and Confucian Kikuzyou Kikuti. Finally, the paper summarizes young Eiichi Shibusawa's understanding of *the Analects*.

**Key words:** young Eiichi Shibusawa, the business ethics thought, the Analects

### はじめに

渋沢栄一は、江戸に近い小村の血洗島村（現在の埼玉県深谷市にある地区）で少・青年時代を過ごした。彼はそこを起点として、国事のために奔走するようになった。人生のバイブルとして扱った『論語』と出会ったのもその時期である。

渋沢栄一の少・青年時代に遡って彼の思想形成の源流を考究する先行研究はいくつか存在する。井上潤（1999）は、渋沢の出身地血洗島村の地理環境

及び生家「中ノ家」の経営状況を考察し、後の経営実践に与えた影響について検討した。さらに、渋沢が周囲の人々との関わりや彼らから受けた影響についても検討を行った。とりわけ渋沢が尾高淳忠の『交易論』、大橋訥庵の『關邪小言』を筆写したことに言及し、水戸学の影響により強く攘夷論に傾倒したことについて論じた。また、于臣（2004）は、渋沢の生家の状況、父からの影響、尾高淳忠の教え、江戸の遊学経験などの点を考察し、以上の経験に基づいて、後年の「論語算盤説」が誕生したと結論づけた。以上の研究者は、渋沢の少・青年時代の経験を後期の経営行動や思想形成の土台とみなして考察を行ったが、渋沢と『論語』との関係を中心にする研究はほとんど見られない。渋沢はどのようにして『論語』と出会い、親近感を持つようになったのかについては、はっきり論じられていないようである。

よって、本論文は、渋沢と『論語』との関係を軸にし、少・青年時代の経歴を改めて考察する。具体的には、まず時代背景として、江戸後期における漢学教育の状況、富農層の特質及び江戸商人の商業道德思想について概観する。そして父市郎右衛門、従兄弟尾高淳忠、儒学者菊池菊城など、『論語』と深く縁を結ぶきっかけを与えた人物について検討を行う。

## 一、渋沢の少・青年時代について

渋沢栄一は1840年2月13日、現在の埼玉県深谷市血洗島の富裕な農家に生まれた。彼が生まれた1840年にはアヘン戦争が爆発し、日本は清国の敗戦に大きな刺激を与えられ、対外の危機感がいっそう高まってきた。その後、日本国内では開国と鎖国の論争が激しくなり、危機状態に瀕した時期に入った<sup>1</sup>。渋沢はそのような「激動の時代」に成長してきた。

また、渋沢の故郷血洗島村は、江戸から僅か20里離れ、江戸との経済的交流が盛んであるため、「早くから貨幣経済が浸透し、農家における多角経営がかなり進行している土地」<sup>2</sup>であった。そればかりでなく、江戸の情報や文化などを早い段階で集められることから、「江戸や水戸の攘夷論者との連絡にも便利な地」<sup>3</sup>であった。幕末の日本国内においては藍玉価格が急騰しており、血洗島村及び周辺地域の農民が、より一層換金性の高まった藍玉の製造・販売に積極的に取り組んだ。それを背景に、渋沢の父市郎右衛門は「中ノ家」<sup>4</sup>の家業を受け継ぎ、養蚕と藍玉の製造を発展させ、経営状況を向上させていた。渋沢が生まれた時期に至っては、「中ノ家」はすでに順調な経営動向を示して

おり、在地におけるそれなりの地位を確立させていたのである。

渋沢はこのような環境の中で育てられた。続いては、渋沢少・青年時代の活動をみてみよう<sup>5</sup>。

1845年 初めて父に句読を授けられ、尋いで従兄尾高惇忠に従って学を修む。また書法を初め父に、尋いで伯父誠室に、武芸を従兄渋沢新三郎に学ぶ。

1853年 家業を助け、農耕・養蚕のほかに藍葉の買入、藍玉の製造及び販売に従事する。また米使ペリーの渡来に刺激され、渋沢の胸中には攘夷の念が萌す。

1854年 叔父保右衛門に従って江戸に出で、書籍箱と硯箱とを購入し、帰った後は、父にその奢侈を誠められる。

1855年 十六・七才以後、従兄渋沢喜作と共に近傍諸村の若者頭等より推されてその指揮に当る。

1856年 父の名代として岡部藩の陣屋へ行き、用金の命をうける。代官某倨傲にして、渋沢のことを侮蔑する。渋沢は痛憤し、封建の弊に対し強烈なる反感を懐くようになる。

1858年 尾高勝五郎第三女千代子を娶る。

1856-1859年 年に四回商用を以て信濃・上野及び武蔵秩父地方を巡回する。時に従兄尾高新五郎・同長七郎等と同行し、多く詩文を作る。家に在る時は書を読み、剣を学び、志士との交遊が次第に広がる。

1861年 江戸に出でて儒者海保漁村の塾、剣客千葉栄次郎の道場に入出し、二ヶ月余にして帰る。

1863年 再び江戸へ出で海保塾及び千葉塾に入る。その間、度々帰郷して攘夷の事を議する。従兄尾高惇忠・同長七郎・渋沢喜作等と高崎城夜襲、横浜焼討ちを謀る。10月29日京都より帰京した尾高長七郎は会議を行い、国の形勢を説き、挙兵の中止を決定する。

以上、渋沢の少・青年時代の活動を特徴づける事項を中心に述べた。渋沢は、幼少年期から父市郎右衛門と従兄尾高惇忠のもとで漢学教育を受け、伯父誠室、従兄渋沢新三郎に書道、武芸を習った。10代からは家業の手伝いに精を出して、一人前になった。青年渋沢は当時の社会状況に反発し、江戸へ遊学し、多くの人々との交流を図った。そこで、尊王攘夷の思想が彼の中で芽生えた。しかし、筆者の問題関心は、先行研究にすでに検討された尊王攘夷思想の形成過程ではなく、渋沢と『論語』との関わりである。それゆえ、

本論は『論語』と出会った少・青年時代を振り返ることにより、渋沢はなぜとりわけ『論語』に拘っていたのか、如何に商業思想と結び付けるようになったのかなどの問題を明らかにする。

## 二、渋沢の成長環境

本節では、まずマクロな視点で渋沢の成長環境を検討する。「漢学」と呼ばれる中国古典への造詣は、江戸末期から大正期にいたるまで、多くの知識人の基礎教養であった。渋沢栄一と『論語』との関わりを検討する際に、彼が少・青年時代から受けた漢学教育を前提としなければならない。そのため、まず渋沢の少・青年時代の漢学教育の現状を考察する必要がある。なお、前述したように、幼少年期の渋沢に漢学教育を実施したのは父市郎右衛門、従兄尾高惇忠をはじめとする親戚の中の年長者である。彼らは江戸後期の富農層に当たるため、当時の富農層はどのような漢学教育を受け、いかなる思考行動を持っているのかを明らかにすることが求められる。さらに、渋沢の生家は半農半商の性質を持つため、江戸後期の漢学知識を持つ商人の商業道徳理念を考察する必要もあると考える。よって、この節では、以上の三つの点をめぐり検討する。

### (一) 江戸後期の漢学教育

少年時代の教育状況及び自分が受けた漢学教育について、渋沢は以下のような回想を述べた。

「私の少年の頃には当時徳川幕府の膝元たる江戸に於ける教育の主たるものは漢学であった。多くの武士、大名、旗本、御家人の学ぶべきものは漢学である。そして其論理的学問は主として四書によるものであつたが四書は難しいので、少年に対しては三字経或は蒙求、小学などをよませ又孝経も読ませた。此等はみな少年のもので、十歳以上になれば四書、五経を漸次了つて歴史物に進むが順である。(中略)私は田舎者であつたが、田舎でも身柄のよい百姓は些か宛は漢学を学ばせたものである。田舎では普通のひとは四角文字を読むものでない。四角文字は農業の妨げであると之を禁じていた、禁じたといふよりは、読む力がなく又暇もないのである」<sup>6</sup>

この回想では、江戸における系統化した武士階層向けの漢学教育と田舎の系統化されていない独自に行つた漢学教育について言及した。実際に、当時

の漢学教育は、主に以下の三種類の教育機関で行われている—①武士階層向けの公的な教育機関である藩校、②庶民層のための読み書きと実用的な技能の学習機関である寺子屋、③民間のアカデミである私塾。江戸時代の武家は、支配者・指導者であり、その地位にふさわしい教養を身に着けさせるために教育機関である「藩校」が設けられた<sup>7</sup>。当時の藩校の教育は漢学、特に儒学が中心で、入門書としては『千字文』や『三字経』なども用いられ、儒学の教科書としては孝経、四書五経などが一般に重んぜられた。学習形態としては、一般的な漢学（四書五経）の素読・講義・会読・輪講・質問などがあげられる<sup>8</sup>。それに対して、江戸時代の庶民生活を基盤として、庶民の子どもが読み・書きの初歩を学ぶ簡易な学校である私設の教育機関の寺子屋が成立した。特に江戸時代中期以後、寺子屋が発達し、庶民の子どもの教育機関としてしだいに一般化され、重要な位置を占めるようになった<sup>9</sup>。幕末にかけては、地方の小都市、農山漁村にまで多数設けられ、全国に広く普及された<sup>10</sup>。さらに、寺子屋の教育は「読み書き算盤」と呼ばれる基礎的な読み方・習字・算数の習得に始まり、『六論衍義』、四書五経などの儒学書、文字を学ぶ『千字文』、『国史略』、『十八史略』などの歴史書を用いて、教育が行われた<sup>11</sup>。一方、江戸時代において、もう一つの教育機関として注目されたのは「私塾」である。当時幕府は漢学、特に儒学を教学の中心とし、学問を奨励した。そのため、多数の儒学者があらわれ、儒学を主とする漢学塾が隆盛を極めた。幕末の私塾は、自由に開設されたものであり、藩校や寺子屋と違って身分上の差別も少なく、多くは武士も庶民もともに学ぶ教育機関であった<sup>12</sup>。

以上、江戸後期における三種類の教育機関の状況・規模・教育内容について概観した。ここから、江戸後期の漢学教育と渋沢の関連について述べたい。幼少年期の渋沢は、主に父市郎右衛門と従兄尾高惇忠のもとで勉強を進めた。当時の教育は、主として漢籍によったもので、渋沢が生まれた当時の埼玉県では、『千字文』、『三字経』等の漢籍を読ませてから、四書五経に移り、その後は唐宋八大家の文をよみ、歴史物の国史略、十八史略又は史記列伝等の学びを一連の流れとしている<sup>13</sup>。渋沢の少年時代に関する史料に目を通せば、概ねそのような内容を学習したことが明らかになった<sup>14</sup>。さらに、渋沢は一つの私塾を通い続けていたわけではないが、『青淵先生六十年史』で「又武蔵ノ人菊城ト號スルモノ来ルニ會シ論語ノ講義ヲ聴ク亦尾張ノ人中野謙斎遊歴此ノ地方ヲ過ル依テ止メテ文選史記等ノ書ヲ學フ其後老儒太田玄齡ニ就テ質疑ス

ル所アリ（後略）」<sup>15</sup>と述べたように、渋沢自身は尾高惇忠の教えを受ける以外に、中野謙斎、菊池菊城、太田錦城などの儒学者のところへ通い、質疑し指導を受けたことがある。これらの遊歴学者のもとで講義を聞き、学問を磨いた。さらに、1861年と1863年の二回にわけて海保漁村塾で数ヶ月間習ったこともあった。少・青年時代の渋沢は漢学を基盤とする家庭教育と私塾での教育を受けたとすることができよう。

## （二）江戸後期の富農層の特質

前述したように、渋沢は富農家庭で生まれ育ったことが分かった。続いては、渋沢が生きた時代の富農層の特質について検討しよう。

経済の発展につれて、江戸時代に初めて本格的な商品・貨幣経済が到来し、商業経営者も現れてきた。江戸時代は大名領地制が確立し、完成した時代で、その上で生じた参勤交代制度により、江戸の城下町が大いに発展した。さらに、水陸交通の発達、市場の全国範囲の拡大を引き起こした<sup>16</sup>。江戸後半期に入ってから、農民の上層部である富農層とよばれるような人々が現れてきた。富農層の経営内容や経営範囲は地域によって異なるが、木村正伸（1986）によると、「(当時の) 豪農層は家督の維持のために武士への接近をめざし、その過程の一つに意識上の武士化としての漢学学習があった」<sup>17</sup>とされており、渋沢家はこのような特質を持っている。土屋喬雄の『渋沢栄一伝』では、以下のように述べている。

「翁（市郎右衛門－筆者注）は読書家といふ程にはあらざれども、尚能く四書五経を解し、其書を読むに記誦を力めず、専ら之を實行せんことに心がけたり。正風の俳諧は其最も好める所にて、号を鳥雄と称し、一郷の点者たりき。且武芸も涉り、神道無念流の剣法に練達せりといふ、尋常一様の長者にあらざるを知るべし、翁の実父宗助は剣法を好みて其技に長じ、又宗助の弟にて翁の叔父なる竜助は、号を仁山と称し、ほぼ和漢の学に通じて子弟に教授し、近村中教を受くる者多し、後年先生（渋沢栄一－筆者注）と共に尊攘の義旗を翻さんとせる北阿賀野村の老儒桃井儀八の如き亦其一人なりき。血洗島附近に文武修業の風の盛なりしは、蓋し宗助・竜助・兄弟の力にして、其感化は晩香翁を始め、渋沢家の一族子弟に及び、他日遂に幾多の志士を出したるは、本伝を読む者の注意すべき所なり。」<sup>18</sup>

渋沢家では、祖父宗助の代から剣法を好み、学問に励んでいる。叔父の竜

助は和漢の学問に精通し、子弟や近村の青年に教授したことがある。このことから、血洗島付近には文武修業の風が盛んに吹いていたことがうかがえる。さらに、渋沢は『渋沢栄一自述伝』で、父のことを以下のように述べた。「父の生家も勿論百姓であったが、最初は武家になって身を立てようという志があつたらしく、武芸を学び且つ学問を修めて相当文学趣味も持つて居つたひとであつて」<sup>19</sup>という記述から、父は武士を目指そうという志を持って漢学や武芸を身に着けたことが読み取れる。結局父は自分の望みが叶わずに、宗家の「中ノ家」に後嗣がないため婿養子になり、家業を継ぐことになったが、家業に専念されると同時に、藩主御用達となり、苗字帯刀を許され、名主見習となった。そればかりでなく、武士に憧れる意志は、父市郎右衛門の思考や行動に影響を与え、子弟に対しても武士風の教育を施した。具体的な父市郎右衛門の教育観は次の節で論じることにするが、渋沢はこういった富農層の特質を持つ家庭で育てられたことは、彼の人間形成にとって無視できない要素であると考えておきたい。

### (三) 江戸後期における経営理念

江戸時代においては、商業の発展につれて、商人の経済的・社会的勢力が増大した。江戸後期に至っては、商業はさらに発展し、資本が拡大した。この時期には、西川如見や石田梅岩のような学者が現れてきた。西川如見の『町人囊』は、儒教的な道德理念を強く色付け、当時の商人社会の意識・思想を反映している。また石門心学の創始者である石田梅岩は、孔孟の教えをバックボーンとし、心学を全国的に普及させた。梅岩の『都鄙問答』での考え方は、明確に商業経営に倫理・道德を認める考え方で、商業も正道即ち誠実・親切な心をもって買主の心を尊重し、売り物に念を入れ、万事に粗相にせず売り渡すことを方針としている<sup>20</sup>。

こうした道義性の強い商業経営理念はどこからきたのかについて、土屋喬雄(2002)は「江戸時代の支配的教育思想であり、商人や農民にも広く普及していた儒学の教えが根底にある」<sup>21</sup>と述べたように、江戸後期の商人層は「孔孟の教え」を倫理的な基準としたと考えられる。このような儒教的な道德理念を強く色付ける経営理念は、ある程度「商人」素質を持つ富農層にまで普及されているのではないと思われる。また、梅岩と同時代及びそれ以降の経営理念に関する本も多く刊行された。例えば『商人夜話草』(1823)、『商

人平生記』(1824)、『渡世肝要記』(1807)などの書物があげられる。これらの書籍は、主として江戸、京都、大阪の書店で刊行されていたが、渋沢の生家所在の血洗島村は江戸の近くにあるため、ある程度は読まれていたと考えられる。前述したように、渋沢の生家は代々農業を本業としていて、商品・貨幣経済の浸透にともない、藍玉の製造・販売、養蚕などの家業の変化が生じ、父の代に至っては、半農半商の性質を持つようになった。しかも、渋沢家は祖父の代から、学問に励んで、漢学の素質を持っていた。儒教をバックボーンとする経営理念が日頃の売買に働きかけていると推察される。

以上、三つの点をめぐり渋沢の成長環境について検討を行った。そのような漢学と深く関わった環境は渋沢及び彼の成長に関わる人々に影響を与え、渋沢の『論語』との出会いや彼の学問形成の基盤的な要素となったと考えられる。

### 三、渋沢の学問形成

#### (一) 父からの教え

##### 1、父の性格と教え方

渋沢は『雨夜譚』では、以下のように父のことを回顧した。

「斯れから父の性質はといへば、かの孟子に書てある處の、北宮黶の様に、褐寬博にも受けず、また萬乗の君にも受けぬといふ、方正嚴直で一歩も人に假すことの嫌いな持前で、如何なる些細の事でも、四角四面に物事をする風でありました。(中略) さうして其平素から自ら奉ずる所は、至て儉約質素で、只一意家業に勉勵するといふ頗る堅固な人でありました。」<sup>22</sup>

渋沢の中で、父は「方正嚴直」・「儉約質素」・「勤勉堅固」な人である。前述したように、石田梅岩は商人は「儉約質素」という特質を持つべきであると主張したが、父はまさにこのような商人の特質を持っている。

ここでは、渋沢の父が如何なる教育観を持っていたのか、検討してみよう。渋沢は晩年の懐旧談で、「それから孝経、小学、大学、中庸と段々教はつた、小供には記憶し悪い漢字であるから、よく忘れることがある、忘れた時は父から叱られるが、それが恐ろしいので、忘れないやうに一生懸命で復習して居たこと杯をよく覚えてみた」<sup>23</sup>と述べたように、父はかなり厳しい「武士風の教育」<sup>24</sup>を行っていた。瀬岡誠(1976)でも、息子に武士風の教育を与える

ことを通じて、考え方も無意識に息子の渋沢に転化したと指摘されている<sup>25</sup>。

## 2、父と『論語』

渋沢が六歳の時、父のもとで読書を始めており、父は渋沢の啓蒙の先生とも言える<sup>26</sup>。父は『論語』が好きで、日常の中では、よく『論語』を生活の教訓として持ち出した。渋沢は、父の教授がきっかけで、初めて『論語』と出会った<sup>27</sup>。「論語に関する談話」では以下のように述べた。

「元来予の父は論語が好きで、而かも極く厳びしい人であつて予は子供の時から、少しの失策でもすれば、直ぐに論語を引き合ひに出されて叱り付けられたものである。それで其時から論語の事は頭に入つて居た、けれども廿五六の頃までは唯だ六ヶ敷い本だと思つて読んだゞけ別にその教へを日常の行状に引付けやうと迄は考へなかつた。」<sup>28</sup>

以上の史料より父市郎右衛門の論語に対する態度も読み取れる。父市郎右衛門は、『論語』を処世準則として見做し、自分自身の行動を制限しようとした。そればかりでなく、『論語』をもって、子弟に教育を行った。渋沢が後年『論語』を規矩準繩とする考え方を有していることから、父の薫染を看過することはできない。

以上述べたように、「方正厳直」、「儉約質素」、「勤勉堅固」という人格魅力をもつ父市郎右衛門は、渋沢栄一に積極的な影響を与えた。父が子弟に伝えようとした「武士的な精神」や『論語』に基づく処世準則は渋沢の中に刻まれ、すぐには自分のものに転換されなかったが、後年経歴に重ねることにより、内在化されつつ、渋沢自らの論語観に転換したのである。

## (二) 尾高惇忠からの教え

### 1、尾高惇忠について

渋沢は、八歳の頃から従兄の尾高惇忠に師事して修学した。尾高惇忠、幼名新五郎、字は子行、藍香と号す。1830年7月27日、武蔵国榛沢郡手計村の名主尾高保孝の子として生まれた。尾高惇忠は「七歳の頃四書の句読を受くる時から夙く穎敏の誉を得同時に書法を伯舅渋沢氏に学び、更に遊歴儒者として此村に来れる菊地菊城に就て経義を講じたのみで、殆んど独学でやつたのである」<sup>29</sup>という幼少年期を過ごし、農耕と藍玉商売のかたわら剣術と学問

に精を出した。さらに、青年時代の尾高は、海保漁村の塾と北辰一刀流の千葉道場に出入りした。そして、1841年に水戸城外の徳川斉昭の模擬戦的追鷹狩を見て、それ以降水戸学に傾倒するようになった<sup>30</sup>。尾高は、1846年から近隣の弟子を教育し始めた。渋沢は、8歳から「毎朝、尾高の宅へ通学して、一時半か乃至二時程づつ読むて帰て来ました」というような生活を送っていた。

## 2、尾高倬忠の教え方

尾高はどのように学問を教えたのか。まず当時の尾高の句読の方法について、渋沢は以下のように述べている。

「其読方は、今日學校で學ぶやうに、丁寧復讀して、暗誦の出来るやうなとはせず、只種々の書物、即ち小學蒙求四書五經文選左傳史記漢書十八史略元明史略又は國史略日本史日本外史日本政記其外子類も二三種讀むだと覚えているが、全體尾高の句讀を授る方法といふのは、一家の新案で、一字一句を初學の中に暗記させるよりは寧ろ数多の書物を通讀させて、自然と働きを付け、此處は斯くいふ意味、此處は斯ういふ義理と、自身に考へが生ずるに任せるといふ風でありましたから、唯讀むとを専門にして、四五年を經過しました。」<sup>31</sup>

尾高は、他の先生とは異なり、一字一句を暗記させることをせず、数多くの書物を通讀させて自然に力を付けさせるという教え方をしていた。それは、当時の私塾の「素読」<sup>32</sup>とは完全に異なり、渋沢はこの読書法を尾高の「新案」であると述べた。尾高の教えは、完全に自由教育で、厳格な訓詁解釈に拘らず、多読を進めた。そのため、渋沢は12歳の頃、いくつかの書物の面白さを分かるようになったといえよう。特に渋沢が面白いと思ったのは、『通俗三国志』、『里見八犬傳』、『俊寛島物語』というような通俗書であった。そのことを尾高に話すと、尾高が「読書に働きを付けるには、読みやすいものから入るのが一番よろしい」と答えた。このような「読書を楽しむ」態度は渋沢に影響を与え、渋沢は後の『青淵百話』で、「読書法」について自らの理解を發表し、「総て読書は修身の要義として読む場合は困難を感ずるのは当然であるけれども、楽しみに読めば覺えずに佳境に入って可成りに読めるものである。楽しんで読むといふことも、亦確かに読書法の一要目たるを失ふまい」<sup>33</sup>という読書法を論じた。ここから、渋沢自分なりの読書法の形成においては、尾

高の働きかけを見過ごすことはできない。

さらに、尾高は、「ドウセ四書、五経を丁寧読んで腹にいれても、真に我物になって、働きの生ずるのは、段々年を取って世の中の事物に応ずる上にある」<sup>34</sup>と主張した。要するに、尾高は、人生の経験を積み重ねることによって、漢学經典の中身を理解し自らのものに転換するという学問の方法を提示している。渋沢は、尾高のこうした理念のもとで、『論語』を習った。渋沢が自分なりの論語解釈ができたのも、尾高の自由教育のおかげであると考えられる。

### 3、尾高惇忠からの影響

渋沢にとって従兄尾高惇忠はどのような存在であったのか、渋沢の口述より塚原蓼州が著した尾高惇忠の伝記『藍香翁』から読み取れる。『藍香翁』では、尾高の人格について、渋沢は、「夫れ翁は克謹己れを持して汎く衆を愛し、生産作業の旁ら深く学に志し、晴耕雨読常に寸陰を惜み、躬行実践して浮華の名を求めず、赤心を披瀝して子弟後進を誘導し、而して謙遜夸らず恬澹自ら居る、真に古賢人の風ありと謂ふへし」<sup>35</sup>と評価した。

なお、前述したように、1841年以降、尾高は、水戸学の尊王攘夷思想に傾倒するようになった。渋沢は尾高の影響により、水戸学に親しんだことは井上潤（1999）、于臣（2004）の研究より明らかである。さらに、『渋沢栄一伝記資料』などの史料では、渋沢は水戸学、藤田東湖の思想に親密感を持つようになったこと<sup>36</sup>、青年時代は攘夷志士になることに思い込んでいたこと、それが原因で父と衝突が起きたこと<sup>37</sup>などが記載されている。以上の先行研究にも論じているため、ここでは贅言しないことにする。

尾高からの影響は以上の内容にとどまらず、渋沢の商業思想の形成にも重要な役割を果たした。後年の演説では、渋沢は以下のように述べた。

「且つ此道徳と殖利とをして背馳させぬといふことに最も努めたのは、蓋し藍香翁を始祖と申しても宜しいのです、不肖ながら私も、今日此実業を経営して居りますが、仁義道徳と利用厚生とを、努めて背馳させぬやうに致したいと努めて居ります、而して其源は尾高翁より伝来致したと申さねばならぬのでございます」<sup>38</sup>

ここで、渋沢は、自分の道徳と殖利に関する考え方が尾高の影響によって

形成されたと主張した。ここでの道徳と殖利統一論は晩年渋沢が主張した「道徳経済合一説」と一致していると言ってよいであろう。換言すれば、「道徳経済合一説」の原型は、青年渋沢の中にすでに存在した。少・青年時代の『論語』学習に関する具体的な記録が残されていないため、確証がないが、それは尾高が『論語』を教授する時に、論じられた主張であると考えておきたい。よって、渋沢の知的成長において、尾高が重要な役割を果たしたことが明らかになった。

### (三) 他の人の影響

青年渋沢の学問形成において、菊池菊城の影響もまた、無視できない存在である。

菊池菊城（1785-1864）は江戸後期の教育家、儒学者で、朝川善庵、太田錦城に従い学問が進み、古学派、朱子学派、折衷学派の知識に富んでいる。彼は寺子屋師匠として知られ、天保末期から弘化2年まで、深谷市渋沢宗助宅で本材精舎を開設し、閉塾後もこの地を訪れて農民やその子弟に講義した。尾高も渋沢も菊池の教え子である。『渋沢栄一伝記資料』では、菊池菊城は尾高の家に身を寄せることがあり、尾高は彼のもとで習ったことが記載されている<sup>39</sup>。さらにその後、尾高惇忠は他の人に師事することなく、独学に励んできた。ここから、菊池は尾高の唯一の先生であることがうかがえる。

菊池菊城自身もとりわけ『論語』を好んでいた。そのことは以下の二つの史料より読み取れる。

- ①「菊池菊城（1785-1864）字明君，号菊城。武藏埼玉人。性豪邁，而好學。年二十，從山本北山學焉。未幾負笈游学数十年。亦能博覽群書。而最邃与論語。終身講之不已。」<sup>40</sup>
- ②「守政曰。家君好読論語。嘗嘆曰。余嘗聽菊城講論語。當時年少，追憶如隔世。及至近歲，熟読而玩味，稍覺有少得矣。菊城而在。則将有叩而質也。而今已矣。是可悲矣。守政亦泫然泪下。因敘其所聞。作之傳。」<sup>41</sup>

以上の史料に述べたように、菊池はとりわけ『論語』に親しみ、塾でも常に論語を講じていたことがわかる。また、『渋沢栄一伝記資料』では、菊池の『論語』に関する講義を聞いたことに言及した。

「先生（渋沢栄一―筆者注）常に此三人（従兄尾高新五郎・同長七郎・同渋沢喜作―筆者注）と往来して、文武を講習し知見を磨きたり、尚遊歴諸家の来る時は、就きて教を請へることも亦多かりき。菊池菊城といふ者藍香の家に寓せし時は、就きて論語の講義を聴き。」<sup>42</sup>

しかも、渋沢は、菊池の講義を通じて、論語の一部の章句（学而、為政、八佾、里仁など）に対する自らの考えを持つようになった<sup>43</sup>。論語に対する基本的な考えはこの時から形成されたと言ってよいであろう。さらに、「余が始めて論語を読みし時」では十四、五歳の頃、自らの『論語』の一部の章句に対する解釈が菊池に褒められたことも以下のように記載されている。

「始めは文字の真義などは一向判らず、只だ師の口によって発音される通り、解せぬながら繰り返してゆく中に字体が解り、漸く読むだけは出来て、後には面白さが生じ読みも達者になった。さうなると講義を聞いても質問を頻りに起こすようになって来る。それで何日であつたか何でも第二巻公冶長篇かの『子謂子貢曰。女與回也孰愈。對曰。賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。子曰。弗如也。吾與女弗如也。』といふ處を私がよく解釈したといふので、此菊池といふ人に賞められた事を今でも覚えてゐる。其後も一度か二度能く解釈して賞められた。」<sup>44</sup>

林田明大（2003）の研究では、菊池菊城は陽明学者であり、渋沢も尾高も彼のもとで講義を聞いたことがあり、その上、菊池が教授した尾高惇忠に師事した渋沢の学風は、陽明学の系統に親近性を持っていたと論じた<sup>45</sup>。渋沢の学風は陽明学に属するかどうかはともかくとして、青年渋沢は頻繁に『論語』を習ったことは確定できると考える。残念ながら、菊池菊城の論語解釈に関わる史料は見つからなかったため、渋沢の『論語』理解は菊池菊城から影響されたことは断言出来ないが、菊池の講義により、渋沢が『論語』に対する基本的な理解が形成され、『論語』に対する「好感」を持つようになったことは確定できよう。

## おわりに

本論文はまず、マクロな視点で儒学教育を中心に渋沢の成長環境についての検討を行った。渋沢が生まれた江戸後期では、儒学を中心とした教育が武

家のみならず、庶民層まで浸透していた。その状況の中、経済の発展につれて台頭した富農層の間では、上昇意識を持つようになり、漢学や武芸を学ぶ風潮が盛んであった。渋沢の父市郎右衛門はそうした中の一人であり、渋沢に「武士風の教育」を与えた。そのうえ、半農半商の性質を持つ渋沢家でも、江戸後期にすでに存在した儒教をバックボーンとする商業経営理念が磨きをかけていると考えられる。

続いては、ミクロな視点で、渋沢の成長に重要な役割を果たした三人一父市郎右衛門、従兄の尾高淳忠、儒学者菊池菊城をめぐる検討を行った。渋沢は父の市郎右衛門の厳しい教えにより、人格の基本色が染められたとあってよいであろう。父の影響により『論語』の修身上の働きを意識し、後年『論語』に基づく処世準則を形成された。また、儒学者菊池菊城の影響により、『論語』への基本的な理解が形成され、『論語』に好感を持つようになった。さらに、尾高の読書法や「道徳と殖利を統一させる」という考え方の影響があるからこそ、後年渋沢の主観性に溢れる『論語』解説が生じ、後の「論語算盤説」や「経済道徳合一説」の誕生に決定的な役目を果たしたと考えられる。渋沢の中では、尾高は真正な実学を持っている人で、陽明学派のように知行合一の人である。それも学問優先よりも、実践を重んじる渋沢が産み出した、独自の『論語』解釈の起源であると考えられる。

総じて見ると、渋沢の中で、『論語』は学術書ではなく、実践のガイドブックであるという見方は青年時代にすでに形成された。この時期は、渋沢の論語観形成の萌芽期で、『論語』をもって「修身・齊家」の部分完成了といえよう。後年、どのように『論語』をもって「治国・平天下」を実現させるのかは、別稿で論じることとする。

## 注

- <sup>1</sup> 大津透 [ほか] 編 (2016) を参照。
- <sup>2</sup> 井上潤 (1999)、p.327。
- <sup>3</sup> 小野文雄 (1970) を参照。
- <sup>4</sup> 「中の家」は渋沢栄一の生家で、一時期に衰えたが、「東ノ家」の三子の元助(渋沢の父市郎右衛門)を婿入りさせた。その後、市郎右衛門の勤勉により、「中ノ家」の家業が繁盛した。
- <sup>5</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻を参照。
- <sup>6</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻、pp.68-69。
- <sup>7</sup> 文部科学省 (1981) を参照。
- <sup>8</sup> 伊藤博 (2012)、p.18。
- <sup>9</sup> 文部科学省 (1981) を参照。
- <sup>10</sup> 『日本教育史資料』によると、19世紀に入ってから、寺子屋の数が増加を続け、幕末においては、全国の寺子屋が約16000軒で、江戸では約2000軒存在していた。
- <sup>11</sup> 伊藤博 (2012) を参照。
- <sup>12</sup> 文部科学省 (1981) を参照。
- <sup>13</sup> 渋沢栄一述、小貫修一郎編著 (1927)、pp.15-16。
- <sup>14</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻第1章「幼少年時代」を参照。
- <sup>15</sup> 竜門社編 (1900)『青淵先生六十年史』、p.47。
- <sup>16</sup> 土屋喬雄 (2002)、p.46。
- <sup>17</sup> 木村正伸 (1986)、p.74。
- <sup>18</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.7。
- <sup>19</sup> 小貫修一郎 (1938)、p.14。
- <sup>20</sup> 土屋喬雄 (2002)、p.148。
- <sup>21</sup> 土屋喬雄 (2002)、p.13。
- <sup>22</sup> 竜門社編 (1900)『青淵先生六十年史』、p.53。
- <sup>23</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.65。
- <sup>24</sup> 竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.5。
- <sup>25</sup> 瀬岡誠 (1976) を参照。
- <sup>26</sup> 「先生六歳ノ時父晩香ヨリ始メテ読書ヲ授カル其時習ヘル書ハ三字經司馬温公家訓等ナリ八歳ノ時ヨリ従兄弟尾高新五郎(又惇忠ト云フ)ニ就テ孝經四書古文眞實國史略日本外史十八史略元明史略左傳詩經書經等ノ書ヲ學フ」出典：竜門社編 (1900)『青淵先生六十年史』、p.47。
- <sup>27</sup> 「最初は父に句誦を授けられて、『大学』から『中庸』を読み、ちょうど『論語』の二まで習ったが、それから七、八歳の時、今は盛岡に居る尾高惇忠に習う事になった」出典：竜門社編 (1944)『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.64。

- <sup>28</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第41巻、p.372。
- <sup>29</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.65。
- <sup>30</sup> 荻野勝正 (1984) を参照。
- <sup>31</sup> 竜門社編 (1900) 『青淵先生六十年史』、p.54。
- <sup>32</sup> 海原徹 (1983) を参照。
- <sup>33</sup> 渋沢栄一 (1912) 『青淵百話乾』、p.646。
- <sup>34</sup> 竜門社編 (1900) 『青淵先生六十年史』、p.16。
- <sup>35</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第27巻「『藍香翁』の序」、p.494。
- <sup>36</sup> 「元来私は埼玉県での農家に生れて、深い学問を致した訳でもありませんので、特に東湖先生に学んだなどと云ふこともありません。去りながら少年の時分に私が漢籍の素読を受けたのが、私の居宅に近い村塾で、私より十年の長者であつた尾高惇忠と云ふ人でありました。此尾高は少年より水戸学問を好むで十五六才の頃烈公の追鳥狩を拝見しました。(中略) 私の素読の師は当時未だ十五の少年でありましたが、夫れを拝見して深く感激し、成程斯様でなければ成らぬと云ふ觀念が、余程強く頭脳に這入つたのでありませう。此事を談する時は実に慷慨淋漓满腔の熱血を以てしましたから、私共も亦非常に感動したのであります。(中略) 烈公若くは東湖先生の主義、即ち水戸学に依つて国政の建直しを致さなければならぬと云ふやうな意念が起りまして、詰り水戸学は自然と日本に於て最も時機に適するものだ、と思つたのであります。況んや水戸藩祖よりして皇室に対して尊崇の念が強かつたのであります。」出典: 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.205。
- <sup>37</sup> 22歳の渋沢は、憂国心を持ちながら、農業と商売への心掛けが薄くなり、尾高と渋沢喜作と攘夷の一途に思い込んだ。その様子を見て、厳正な父が怒り、渋沢が何回も叱られた。
- <sup>38</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第28巻、p.544。
- <sup>39</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第1巻、p.65。
- <sup>40</sup> 小島守政 (1918)、p.26。
- <sup>41</sup> 小島守政 (1918)、p.27。
- <sup>42</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』、p.203。
- <sup>43</sup> 「其こで菊城が藍香の宅へ時々来るのを幸に、論語郷党篇位まで一週間余りも泊つて居て、毎晩菊城から講義を聴いた。此の時は学而、為政、八佾、里仁などは所々に感じを有ち、文章理義も大分考えて見た。」出典: 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第3巻「論語と予」、p.728。
- <sup>44</sup> 竜門社編 (1944) 『渋沢栄一伝記資料』第1巻「余が始めて論語を読みし時」、p.69。
- <sup>45</sup> 林田明大 (2003) を参照。

## 引用・参考文献

- 伊藤博（2012）「教育史から見た幕末期から明治初期の教育」、『大手前大学論集』第12巻、pp.17-32
- 井上潤（1999）「少・青年期の間人形成」、渋沢研究会（編）『公益の追求者・渋沢栄一』、山川出版社、pp.324-337
- 大津透〔ほか〕編（2016）『岩波講座日本歴史』第13巻、岩波書店
- 荻野勝正（1984）『尾高惇忠』、さきたま出版会
- 小高旭之（2008）『幕末維新埼玉人物列伝』、さきたま出版会
- 小貫修一郎（1938）『渋沢栄一自叙伝』、渋沢翁頌徳会
- 小野文雄（1970）『埼玉県の歴史』、『県史シリーズ』11、山川出版社
- 于臣（2003）「渋沢栄一の少、青年期についての一考察」、東京大学大学院教育学研究科紀要第43巻、pp.35-43
- 海原徹（1983）『近世私塾の研究』、思文閣
- 木村正伸（1986）「豪農層における漢学教育の普及とその意味」、『九州教育会研究紀要』第14期、pp.71-78
- 小島守政（1918）『慎齋文鈔』巻中
- 渋沢栄一（1912）『青淵百話乾』、同文館
- 渋沢栄一述、小貫修一郎編著（1927）『青淵回顧録 上巻』、青淵回顧録刊行会
- 瀬岡誠（1976）「渋沢栄一における革新性の形成過程」、『大阪大学経済学』第26巻第1号、pp.196-248
- 土屋喬雄（2002）『日本経営理念史』、麗澤大学出版会
- 林田明大（2003）「渋沢栄一と陽明学」、『国会ニュース』第63巻第1号、pp.89-93
- 文部科学省（1981）「第一編 近代教育制度の創始と拡充」、帝国地方行政学会『学制百年史』
- 竜門社編（1944）『渋沢栄一伝記資料』、岩波書店
- 竜門社編（1900）『青淵先生六十年史』、竜門社